羣書類從

三百廿六上

内閣文庫
和書 類
一八六九〇 號
六六六 冊
二一六 函
八 架

内閣文庫
和書 類
一八六九〇 號
六六六 冊
二一五 函
二 架

内閣文庫
番號 和 18690
冊數 666(409)
函號 215 3

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類従巻第三百廿六上

検校保己一集

日記部七

宗長手記

大永二年五月中比駿府より越前の志ある人にたよりおく
思ひたつ山をしら路をも宇津の山をこえて小萩の中山
まいりて
あらひ文字見えしとけの雲も老の坂也小夜の中山
掛川泰能（朝比奈備中守）亭に逗留二日に普請宮市の城のめくり
六七百間堀をかり土居をつき高さ九尺城とおぼ

日本政府図書
浅草文庫

しるみ此岩志といふ所のおくに只鐵をつらぬきし竹のあり
ともいへし城とおもふ間塔あり清くとしてその
くもりなく風しし此城のく發句とて
　身ゟ角ハくゝもを井のきしの柳哉
又当に池あり誉たかく水ゟちゝくして大海に似
たり元緑池とも云へし又發句
　池の面やさしハすきのにまた海
是ハ河ちゝ年このとあり本城に井あり茶備中守（朝比奈）
泰興寺の筆取らしめ此山をとめてそ築と云ふ
あやかし鶴のとしをつさ御湖ハいふにおよぶべし

種々の道具数をあらためて二三百日にいたれり然もみな
ありいくせるをめつらしく路に退勤にあそ所に黒小
蛙小蛇ありくる寝にあるさそハあるへしやとて出錢
江絶にあらぬ瑞あつる禁の門の底とおもひ波ゆくる
鶇鱸の縄にて人まもりうへのかくらんうし武蔵野の
ありのいほの井ハいかに有名け此城をめくりて大かわ川
ゆかり佛總門といふすめや東西京都の大道あり抑備中守（今川一門後号二俣大膳助佐）
泰興寺におこさえ骸骨戦君此所社山を鳥佐殿
遠塚肥流をさらへて二俣の城へ退け引尾張の堺
岡部浪人に是をかへして加へ所あり信濃之

河の国境まて手重にきこえしも又河西村柳堺に
下野守数年の鈹濱居て海南小まりて本城を蹴
黒山をハ早雲庵（伊勢新九郎氏長）備中守あつかりて当国諸軍勢
うらうらせ也三日に落居して濱松へ吉良殿御知行ち大河内
備中守堀江下野守まくらをならへてうちぬ其外飯尾善四郎（三州之住人源三位頼政末葉　持明院ノ流葉）
賢連吉良殿の中下されしかとも、くたりけれハ是を
此父善左衛門尉長連義忠（今川民部大輔）入部の時に尚行の奉行
として度々の戦忠節をつくし所々の剣若忠帰路の途
中にて凶年の時に為参の防矢数討死しける則（塩見坂討死之時）
討死して後善左衛門賢連に其子善四郎為連伯父善六郎

為清まてうち堺号をかけられ侍ける永正元年九月
初に管領上杉山内顕定扇谷内管領上杉治部扇谷（朝長）ハ早雲一味
河越江戸山内ハ上戸津取にて是も合戦あらへたり
なりて武蔵野まてうちたて侍ほとに坂東路之里
もの有敵退治のためにとて味方まてまかり越へ可十餘日相
さゝへ候を有り氏親（今川修理大夫）九月十一日駿河を進発十二日
備中守福嶋左衛門尉後を出て陣を一同
廿日廿一二日早雲の陣並（武州）相若陣敵退てやと見えけれ
とひとかけ一気敵陣明る辰刻斗兆相方のうち武蔵
将も深山の中に敵味方の軍勢みてなると分りて

雷電のことく千騎かけり馬を入かへ数刻か合戦
（頸定）敵討負て本陣立川（府中立河原）に退き敵も方もうたれ二千餘討（山内〈越後長尾義景加勢ス越州勢関東ニ出初也〉）
死討捨生捕馬物の具其数一日一夜にして大将修理（今川）
大夫氏親同（永正元甲子）十月四日鎌倉まて帰陣一夜日逗留
豆州熱海湯治一七日韮山二三日陣労体息ありて
ありしおりの時に宗長神前に立願申けりし則
神前にて同十日より二日にて千句満て発句　題
四季第一
さきかひくやちるとも花のちる霰　氏親
青柳やこうもかふみしの末緑一ろく　宗長

又八九年しろく大河内備中守おふあかきころとて
遠江の辺まうち入引馬まして当国浪人お百姓以下
を捕殺らをりかを向今度ハ悪る廣左衛殺大河内
度生害許されらを古良教代つまて悪党先
以発せられ谷帰陣泰氏冬（永正九年十二月）不慮にて病死力なくよ
其ハ泰綿おもまて（備中守）伯父泰以ありて補佐（永正十一）
大河内信濃三州尾張をかひらくて大乱てつ
度八進発並井伊櫓厳當にたてらる誘（遠州住人）軍勢
川を打渡大菩薩をゑ山に着陣井伊次郎（治部少輔義達）深嶽
とふ山武衛を着陣中又浪人以下相ありて無数の

篝曉の星れとし泰以（朝比奈）金もとくこうちおとし武濤
同奥乃山より遠江尾張帰国せし源嶽の城ハ大河内
甲斐（武衛被官）兵衛佐か数千の軍兵をもつて二ヶ年に及ふ責けれ
落居せさりしかハ泰以戦功あるにより当国に属して（相済各帰国）
其後（永正十二）甲斐国武田次郎信縄にかゝる氏親合力の手（甲州勝山城ニ今川勢二千人籠國人别心故）
あり又氏親をとえて大河内当国を領ん信濃守人数（正月廿八日ヨリ至三月二日和談）
催し武衛（義達改名義敦濱松庄川間在陳）とゝもにひ中天龍川を渡りて社山に在する所く
押領せしを当城より八幡を立られ八幡の旗を立
おきや世よこほらぬ所をしたし不清を
泰經伯父時茂（下野守）八幡をも護し当国を同様加えの誓ふ

厳重なる甚大年下旬の比城をうちしつめ討成（氏親）
洪水大海のこと（天龍川）舟橋を一のまかせ数三百余艘とり
大縄十重廿重を陸地にたり氏親の旗を立てて子句
かり発向
是まで年ハうち人をなくぬ渡しもあし
今にまことハみなからんへ乃まかりと中へかけ立をり歓門
乃むかひよりかけて討ちたもの乏しく数万余の軍兵
やすくとゞまらすわかれて歓を防ぐ然とも引入ぬ歓共
城ハ七ツめくり五十余町乃内へかけ二六月より八月
まてく攻らる城中を一てくれ軍兵数日をへて八月中（永正十三年）

九月に落居安部山の金掘をして城井の筒井をとく
き破りぬれハ一滴もなかりしかハ大河内兵庫頭父子
巨海高橋を初め楯籠る侍衆数輩ハ討死ありけれハ 九十餘人
まてけるハ生捕男女落もあり辞月もなくしてまよひあり
武衛父子ハ個をして出城ありしを 駿州國府 普済寺に会下するハ
しを法躰出家得の人数皆出家尾張へ送り申されし 永正十三年入道法名安心
まえて 遠州 繋山 同 二俣 同 伊井の奥の山々所々にこもり
斯波氏譜代の不思議ほとや氏たの内衆中出國せし諸
もる年月ニ四ヶ度あり柳営の尾張守國出分に
中比上意にハもなく武衛御領ありさりて流あり

分行年まて範國 基氏二男 宝光寺殿 法名省心 永仁五年丁酉誕生 範氏 範國一男
氏誕生正和五年丙辰 泰範 範氏一男号長慶寺 誕生建武元甲戌年 範政 泰範一男
誕生貞治三甲辰年 号全林寺 範忠 範政一男宝昭院 誕生應永十五戊子年 義忠 範忠一男
誕生永享八丙辰年 号長保寺 知られハ泰範の時よりおハたらまて 武州遠州入部ノ間八十五年也今川ヘカヘル也
八十五年ハ義忠入道子細ハ河内守範満号光院領家
川名善廣院敗留あるを判あるて入部の年その時
将監宗門以補として有吉州より渡代職き良殿の内 七郎右衛門尉定
巨海新左衛門尉とて居残請所にて出城り此城を
入りて将監合入部と遠孔をえるものこの者共白身
在して八月より十一月まて将監の城府中をたるる同廿日 横地勝田御供ス 寛正六年

をも落されし将監生害せしむ宗円か捕ら侍足将監助
一類武蔵の将監加賀守（当国総代）同名にして与力を
結句加賀守息次郎生害させ家督となりて当国人
のまゝに知行せし又当方へ力をつくしかくのことし
されハ安頼の将監反謀殺せし山中甲州につかさせめ入
りさらして二ヶ年宗円か捕へ豪州数多軍兵とも引入て
しせ山中まろち入棄内志して慈責こすいまゝ静謐を
（義之）大名も又兵とも代々方々にあるす当国の半度仁年中細川
讃州三河国守護代（貞観朝臣）東条近江守氏（遠州）年楯に従ひて
合力ある任撰ありて当郷に依存大道の沙判たまゝる

御殊なく宗円か捕巨海退治則参河坂引馬より数
年数死去の事ありとしてにてかまさまゝ義忠其十二月帰国明
る年浪人蜂起して小夜の山にして横（瀬名貞延）地勝間（今川族）田城系
處に討死数家館並所々合戦味方理運されとも数内
残党ありて休義忠又進発残る所に両々中かりけりて
味方の凶事ともに打かゝりて人々ハ各討死をとく二ヶ
年のうちに先祖左馬頭肥後守泰盛是れ左馬尉二人病
死す是たるにあらすさまハ度々の合戦に利をうしな
ひ義忠帰国途中の凶事也依之まや氏親入国（遠州）
静謐とハいへとも騒国の凶徒ありあまたありしに三河国

境舟方こいふ山に味方有田原（歟）弾正忠（戸田）諏訪信濃守以下
浪人充催し舟方の城うち落す城守ゐ来（今川方）又三郎討死
す献よの城ともに門泰以時をうつさす浜名の海渡海し
て引うちかくし数宗討捕引奥郡道半数向して堀
川に楯築此十ケ年泰以福佐して泰能にまかせし帷
中後河よりもとも府中のちこいりて閑居されしも清用にい
遁世ともなん浜松庄奉行として飯尾善四郎豊連夜日
一夜日退参当庄のうち山に住まいたまう細江ところ也浜名
備中守鈸一日連歌あり
此たれてそのやさき清このあまつれ

本坂といふを越て西郷宿所に一宿して熊谷越後守館
勝山に一日とゝまりて連歌あり
あふち咲くの井をちらすゆふくれの雨
八幡ちかきに牧野四郎左衛門尉宿所に牧野の家を以て牧野伝
蔵をいまに一日連歌ありて
ゆく袖を草葉のかけの夏野かな
此宿打越縁に障り有事ありて夜作八橋といふへきところ
らはにて同国知多郡和泉箇鈸所屋に一宿尾張知多郡
常滑水野紀三郎宿所に一日雅男とは不及記胡の扇あり
ありより伊勢大湊へまかり山田につき侍り則来宿させ

ゆかしく立願の事ありて當宮にとゝまりて千句宗碩法師
さそひきたりて七月下旬下着やかて八月四日より
始め毎日二百韻あて吟五日にてみちぬ此千句の事今の管領
高国江州におはして入洛の祈法楽として立願中也し
ゆへ紫野大徳寺真珠庵（一休ノ寺）のうちにありし時御芳恩
の御礼ハ是謝せん中へくたりしや其一ゝ法発句京都より申下さ
朔日秋風方里ありかへるこのもとの柳　高国
梅さえしくかゝりしもさなひく柳かな　宗長
山田の岩瀬見残おさめらしつ宗碩ハ此ついて尾張へ
越長（宗長）一両ハ小塊此旅行むかへて当国におもむきおさむらす迄て

あの十六日に又おもひ立ぬ雲津川といふの河のあなた
た南生年楠の城まで里の一ちひも絶られ中也
何ぞとハ関民部大輔今ハ隠遁何似斎といふハ家
より京七郎左衛門尉盛数の次の八幡まで此何
さて自分平尾の一宿まで山田戌立平尾の一宿此所
かつた秋ごとあまく出庭の桝をあまえそうらにおもて
みなたれ此方浪のはたちのうちら風よりはなく雲津
川又浩ある家あれ人ならではえかへるくたらもくしるらる
此津十余年以来荒野となりて四五千軒の家堂塔跡
のミ浅茅蓬か杣と雑犬ハみそ鳴鶏まれなり

折ふし西風たゆみおさまりしとてわれ人〻皆よろこひて
乃人ハ来らあらすして途迷ひしなむ方をたのみ色
たちまちに待程に有知人きたりつけしらせあるの
ゆかりある松窪田といふ所二里をへたてたる庵中
に家おのれも人〻家栄以下具してたつね来りぬ今宵の
主為もてなしさにおもひ待遇の一宿ありける
なとしてその夜の詠草に
思ひよる光もそふらし孫康か山も月夜かゝるにとすらん
ゆのことく江州さのふあみちゆくさくるとも何似為乃
鏡亀山程三里ほとの山に入て三町余にて新福寺
といふ律院のうち成就院旅宿主の薬の掃除因を
たのみしつりて侍り十日餘り休息毎日の慰に申しい
さてぞ侍りし速詠一首あり
八十乃淵のさかりしあり秋の智
孫康川八十淵のあるとはいふなりけり
なき迄も寛如おもしろきを屋より　何似
曾祖の祥歴く見る三人十七十三十一秋の此の花乃中にも
も出立し又なりても将植軍の用を陳中せし江州蒲
生の城主讃にて退治日数よなりてまかりし浪人の
佐中為後治の合戦度〻とせ雪也道のやまとらぬをあかし

せちにしきたまふなかりぬかりひたかりは有家雅経等乃
をくりハかしこきにも又山田に立ちてかへらんとせしハ夜
風やゝさむくて遥遊しける
梓弓やうてたる夜も遊ひはさらなくて右や定家ん
にあらんとのすて遥遊ともなと誹諧乃筆状にかきてひ
硯の行くはにちく浪ひたる浅人何以侍人々うまにや
いはく君居とて定んあつさるそして今ふ陸奥なりのせん
いひやられぬ艶なるかなしかり淀田の六古院より夜
る訪れもり
まことやたいちくけなる古の汐のか

あの院乃后尊院為のみなも鍼灸へ人つてしましまとも
らきしものかいあつりたるもの坂本まてしもへの行さる
行舟の津を過る墨塩釜の中なる藩ふさにに何似
りとくる又の日ハ宮本盛孝より北くの人を請く
遥遊この津の人々熟るよく遊覧あり
こえるより残まつやあつるむさ秋興海
此里もその津還往乃行るましき年たるよし此浜の風ふ
へ立出て渺々たる遠近伊勢尾張の海つらくまもと
なく見えまたこされ休らふほとに夜かけおちに若荒
請引所につきたる酒肴催鼓なともして来たりて興

に入しかとゝめの名残も紅葉もなをの秋またんに猶若
して
これ夕なと紅葉もなき拘代みの名座の人のかり
旅に入て城の内にて法をまくらの人々地せしに谷ふの
若衆いつまに給ひ合む読経をもてなひやうそのへつましし
あしたにひきしかりし門
　おもしろきものゝ称のせちの法をきすてられ名残おほく
九月一日あさとめしてとのくりとの津のあみにまつく
酒めこせりたきに別れおしくさて雲津川にいたりぬ朋会
あるに長教京の使の山伏せしをゆひ文ともさて草庵

の宿へとも成山一宿の次のしめにに泊るの事て
むし法まてなきをいおとに根つ名の谷に名なか入る鎌倉山か
慶孝この一宿をゆつきよく名のむきりとぞもせらるまじし
と成り同二日に山田へかへりてこの種の旅の先座を書
ありし侍るのかなし
同月廿日けふの内宮の建立あまりてあか谷とて
りの上人の旧跡へ名読り寿く五十鈴清営渡のまへん
とおもり山田の行世の如て名も荻薄の影ならしとるか
さし入の陣そこしん蓮をたすり山あとかもいまのあ
その世なりの松のすこし竹ある垣のうち坊に庵

十餘人なりし衆此會麻のつくゑ樒のかたはらにおかれしにも
みなやうにおもひして帰し人もありけるとかや
雪しもいろいろあはれなき世といふに首おもてゝむかしがたりも
松かえの枝にかゝりつゝも偏り侍りし誘引の人々發句所望
秋毎にし秋路荒おくれ谷乃夢　宗長
月を中ふ庵のみ杉のまへ門の跡　建國寺
いにしへ上人の旧跡乃西新なる庵し
十月に山田といふて多宗二日三日逗留連歌一座
神な月のみちをも衣新端の那
泊瀬に詣て一日二日侍りし比を京まで知人来り

て頃日相説してかくらきしにゆつかしく侍りし
たゞせ山入あの讀をやまそれむかしを今のたしなみきて
多武峯にお参れ折の誘引にまかせて出山して微に
侍しかり見るハ月枕とかくれ侍り宿坊安養院連歌あり
發句
霜をけりやあつきを忘をまむし深一ケ那
今春七郎秘ふしく来り彦形させひおて酒数あた
こうしにかりぬ翌日橘寺一見して大和の府八木に一宿
叶ふか日白毫法眼澄英の坊に一宿又明る日南都に
院院英因道連歌あり發句

みやい川よりくさ山乃まへ日ク部
一日ありて慈尊院十日行中ゟ宿坊まで参着
七朔ちるやあらしの花乃雪の庭
蓮華院にて
倚しれちるあらし丸雪乃花のみち
大佛よ帰れつまでまでに山城薪へまかりの所々門なく
かまこれさ絶まくちて破れ坂に倚さる打食糧数
志らまで坂乃松のかげに落葉を焼て酒あたためかし
て興に入侍りし宿坊にして出立の数双坂にて宗
楊より侍るとて腰をつき換し　則

たのしみ杖つきなれし舞蕗はつかぬ老の武さところひぬ
さらく菊閑思菴にたちよりてつきぬ紹宗として尺八吹増
もとハ東山霊山の府宗丞余東洞院常福寺は寮掛大化
院にて年も行りてこの比ハ和泉の堺に居て尺八吹
事を好ふく活計侍る事かつく長河打かし
山田に逗留為来て十日行中ゟ長行ハ山城薪への不
るしたより慈救をそなへし共とぞ空にしいさ行らむ
二見の浦の浪にたち川をなみとつくし空て
無常んれたつを一曲吹きして吹志つるむあかり久とや
菊頼まて流さへ空しとなりへし山田へ市流るて侍り

しせ尺八物もかくて詠のともなりハむとて妹乃尾
附宗顕といへるもつれ々のほせをさくハ一所すゝ川かくる
瀬をものかせ侍りけん酬恩庵をもしめ返されて三條
西殿逍遥院殿より
わかある薪ハなにをもはかなき家古の花乃名をもとへかし
打返し三ハ侍る稀の山家の冬とや侍らめし
清きしるし侍る薪の山里の名をのこたの山家のうちな
宗碩法師得のちへくるかの所々も出当等の清流僧都の
むかし生田の表乃初あらしなひ出れかやはつかし侍し
君をしたひたる南へ相残山城乃岩田の森乃雪のやり筋

酬恩庵にして東紙の住ひけるもなくし歳暮にや
とくの給ひけるなり
給ひたるハえもし丸筈の薪こる峯の雪にあさ紙に消なん
明る正月酬恩庵にたてまつりしに逍遥院殿御詠とてり
給ひし御首
去年まで宗文にうつりへしもののひめへし夢のおもかけ見えとも見えて
いまハ也谷の戸出に待里の一村さへぬれたるかくひ寄
富士乃雪清見かた月を見にやまもしらん山の雲を麻さ
山人のおくる名にある薪をハ花のうきもひてとひてや
家もいさ岸によりさむくかそのうれ薪もむかひ花ぬる

右卒述卑懐呈柴屋老人禅旅下　逍遥子

大永癸未上巳後二日

捐筆やたくみ

このついでふたゝび長栄まで芸のおもはちくと知極

わかみつもと秋の末わつくなくいさき老る夢の谷のらく寺

いつこなるらむ雲のへ月の前のまゝに大ひさうら枕とから

座もむへこさうもとをそ此拝くまんせうるむ五嶽の峰も乱りなど

朝夕のあはれ嶽を見てとをもうちひとこりにまてぞ御らん

京にあたまいなど文のありしに乞情などやとてとふりし

乞つゝもありけるにはなおもる今はのわかなさぞあそれ

わかれし年正月よりせん庵にてもち井かうしをゝくりしに

承りてひさしきも京の朝夕ことのはならひて名残

本津より西をへり

座まかりても露けり乃名かゝ川ゝ門

南都より所々に

そのあくる秋さる一世いくつけるのいろ

うちひそめのいとによらるるやなさ民

極也油小路後まゐる万寺をとく久人朋友の栄居をとらふ

らひ来りて十一秋より何某の枕をならし人々にいりをも

いさくなれ人々にて時死乃時なるも何かさりしに

国立公文書館 National Archives of Japan

かさね迄ハ七ツ何も六つもいつくくハ附まつる附花山ふみ杯
宇治白川別所辻坊より来る路の赤飯そへて柳一荷梅漬
桶二青梅漬ねりまぜにそへて
はりあの露も忘れぬ人さしいと細腰乃柳とわすれ難
かへしに扇なとそへて贈
浅みどり柳と梅の二桶ハあらであまたの人をもそへたるやさしさ
ある方にて飛花嘱食つ移にすゞ夜をそれとくやしき歩みけり
まへにさかにもひしくれ冬つゝの中にも見えつゝそその
うちと金剛経永施十二の幼おさめて呪せしも薪ん倩
廣ふ侍りし此廣ハ祇園周防後室慈香禅尼法名

とりおく露なり老語と云く奥の瑞ニ出侍りし
露さへハ梅に吹風にやしなひのらちの色のおもかはらぬ臥
数ならむ身もあらぬうしためひとくなとにいまたの附まて
もそひくいりしことも周防前（茨川城主）杉到年来兵他乃弟
思ひ立も遁世のゝちあの東山安養寺にして子句のとふら
ひし侍りし杉到入道身後なる残りの数もあり
し故なり道遙院殿中たち肖柏法師宗碩法師寺
町渡し和泉河原林對馬守なとも上洛前とに路次のまゝ
なりし子句まゝ
身になれおちる雨しかたも夏語

芭蕉桜花のみ早なさ残りまさかひて和歌能をやしなひ
まさやかなるひとられ侍らぬむ
三月葬り出京の頃より宇治白川乃別所辻坊にて
なるやはらかけ移ゐまさされぬなかけ桜
さけるひの春の花せにやむらひ乃寺めぐらみまさにあり
京にまくかはる名所にして
うかせこ乃宇をとらかさてるさくら武
山科に所なりけり
いく世根まで羽のなきさかけるのうた
丹後より京なきよ

まかりのぼるかまとにあきやよきおらみ
国三月より
あひまかりひ思ひならふ人乃やまひむれ表
人乃年忌のならふひよ
花まで、めぐりせかし玉かはるの路
三井寺より京なきま
都とせさたる迄杉村のなくさきを
紫野大徳寺山門造営乃来門徒老僧祖人禅師鐵
舟一宗源嶽末期に京都へ宗抱忠へまく参りて三孫
下る無かし、かりて三月十五日に一宗に下花朝余六

寿庵為教京造営の事中原庵さうし有て中原侍
至清くもなくて祖父事行後孫共駿河へ下りて
翌年孫共上りしに真珠庵より此造営の事大切成
ゆへしばらくさし置し書状有しも何某かの前
至も新に備る無之修造の為銭五十貫文上納ある
べき旨候と心得て真珠庵留所へ入来有しも孫
尻儀おはしし紙業之孫下共かの事再興まへさ
らし有し教京よりも此修造かへさとかなくして事さて
つまりはかなこいなさし申はしこ於尻儀のさたさして紀ま
より孫下つ至教景五百疋余外清春二百疋余中納

つまりと今に京兆せさとなし真珠庵用於今ハけまよ
わくもして兆之行至ま之何年かの何分らぬ於治部卿まと
允二万疋よおさへ使より寺本に寿庵為ぐして京より加し
至申年来其他知者より見ハ去之河奉加の合力として去年
其四月はく二万疋寺納修功あらえ猶寺納中の旨なく
書状あり紙業返答中発句
行こ来と来なまや行ちち岸丸雲
為りかるたれしらはなのあまこう非
附為新とし庭の石木其他影訪よく
夕まちや陽のせしこ川乃党小露

おりゝ毛ハかゝきつくれ一時ゟか
宗祇季吟
まつ川やよりかゝりしの秋の木
萩もちれふみぬ野べのあしたの秋
八月十四日
月夜いかでうらん所もあ夜くもは
露とこそまつや西の名也月の秋
平泉寺ある所にて
越前ありの何りけり時江州観音ある所にて
あさこさむき此山ハいやうの毛身一まつりか

みしやかたちと見えつゝつふ鶴戸りか
康の寺や尾上のあらし夕月夜
志かまにて
秋の海たゞれさゝなみのちくさきの秋
薩摩にて坊の津の高人京よりく良行よ
磯の上ねちしかもけふこの世ふへ民
此宗の坊の町にて
うらハ見えし明戸も霜の板屋かな
有馬の湯治のついでに見屋寺にて
志みのそりめくる住をゆきくのあしたかな

有明やものよ露の道のながすさ

城山能登源五郎　十句有

うましたけ代のとゝ茶の事の初よ成
我年も薪刕息庵傍捨蜜下炉色六七人あつまりく
田宗の温噌のつゆく俳諧あみひくよ
あるそのしるさも母ゝ子のありかけりみ成
かゝハしきのおちれたりけん

歎

茂原うゝかゝゑんハふちたかさ

馬鞍もさんとくつきん乃源九郎

引きつゝも神ありあそすまき
はり乃虫の山もれを枕よく
高野知りまれやらをよ杏
夜の秋乃屋ま道りや堂さちらく
なんみやし坂本大毛会とも
あろされせらへん坊や文珠院
風情もつきそ知さやいまみん
人よ月たれしるのき道小屋よ今
男ゟ女この孫七乃あゟ川愛
まくうしろさろ今まよ月れさ明よ

主上侍るもつゐをおそつけ
さるともはらしと遣頭をまゐりて
かんなりうちされぬるれよたりとき
お茶の水梅つゐえまそはくまゐらせく
小雪遊らかたれみとそすゐか
ちお小袖やかささゝつどこ給かとて
まやけのあそりハゐゑ菊のたか
あさ風の吹よめかふこらへそこのみ
さうさぬかしゐらすなりまり侍
とく御しのたらのまこそ皆さ給れ

一帖武帖たるを歯すいたる
むかさていとのあふさの風は御ひあせて
かさそみのおうろもすそハぬまゝ給
なちうろと杉ひさそらまて海か島
御條何つかにたくろあるなせ
たゞ後代のうめき恵てハ御りぬへん
おろし年下そ二人まゐりき
まいこ殊二つとしもる後のうち
花のろしきまもあさうなそゑて
立たるへぬるそて杉まうろおし拘子

国立公文書館
National Archives of Japan

おもひつゝよハもられぬ夜半かな
そも宿よちんすそも旅やとりせん
人のあさけやおなしつらん
女あきめしなくにつきすてゝ
寺のむすめ俗になるつまもちや
尼つゝんてさしもつきとりやちかくハや
不動も客よおこのつらかもえ身ら
家よりもせいそこの流まはりつひて
神乃代よりとすさみれさんこん
ちゝやみか三嶋山もとの茶屋坊を

娘しつみ尼川むかしみれかしく
ころやかくこときまるもおへぬ物おもひ
こゝろもみこゝろくりて引よせん今の
うつゝかるめつ九良の彼方
馬よのりちかき人九をみよ
ちゝにとろ井筒おもとみ草ゐてはまく
をひつつんくとやちるくるらん
言葉ひとつとのおもの座のゆら　宗鑑
高野ひしきぬされ乃をあこの世　宗長
発句ハをひつつむといふ人付佗るらんや

基経のうへはけふハ未な念ゟ

うらひらのすゑありとおもいそかし　宗祇

朝なゝみすみくまもハ言はらぬ　宗長

是も愚句法をまなびらるへからんこり

大永四年正月十一日薪酬恩庵にて遁世ありし門

ありし案内をとゝとて

松も玉のうへのりとひとり山里にもすゝらとやまさんにおほく

試筆於薪酬恩庵院主を年賀一首

七十あまりこゝのそちをそへてゆきハあかちとせのはるはかなり

難苦楽屋ぞ人年頭試筆和歌一首　紹鳳

日本も松とらくのはる日にあらたまのとしのはしめをみよ

同正月十日いまより秋まで薪中にまつのおもひ残

家玉は年とたりひとめさそ

わかしらて我身出りもひとひとかん残のはまのへうつり残へ

ひ松のこゝろ庵とて入らとれりしと思し入るとあるへし

宣胤
中御門殿より

さそはぬ松のまに薪をハひとつひ松ことやまとれとを

同つゝき年々中継述以一首其詞千八句余竟後

再会今頓雖盡種筆未猶若やとて

長采たる松のうちに薪をハむ残ひそ松んたるの山人

れなし正月に
こゝろのとまるやとこの人々行きとまりよみ
南都にて所望有
いづくにかみをば草山花の春の日か
八幡梅坊にて一折の奥行に
むかしのなれしつゞきしみてゝ朝夕も
夜に入て明石若狭守の酒宴に誘はれて立入侍りたるに
よべ使ありし平野かゝる所ゆかりて京のことなどかたり
柳の色はさに枝に流れて出したり
こゝひ中と柳の糸のみだれたるかなしかるに出しまかりて

やさく酒の座縁せられしを心せしなり
京にて
何しとらをしたる人春乃ひかりかれ
三井寺勝林坊京に来て奥行に此の寺まで行けり
山のはは出し月のなりの世にや
細川高國
管領一日千句有
なびくせは雲もこなたの草葉かな
三人千句逍遙院殿月村宗長江州称村冲聲亜
旅月村宗碩無張行
うつひさすやどのかぬきたそれ笠ゆくり

世に飛樂茶とよはれしとつたへ侍り
是も承も老は死すの葉をとく又あひさんもん盛なり
かへし
其道やこの寺くりあし生茶今も老せぬ是つくらん
又弁八下待る折ふし此寺ありて申比つ殿より宗光（宣胤法名）
老の友まいりそこ志にて此寺よ田子の浦波立ハいかとも
此巴し
是にも田子の浦らくに老の波立ちひしたゞぬ日もまかん
胡倉左右集に為京都之庵に贈るの茶をとりせ奉
是せしをさせて去年もしめて菓立せ大小二ツ樽小

縁しさ文乃年ありくしこたびよつきて寶此建仁東堂
一花文詩并あともろくく侍りしに
海て寄はさんろふの業なりて菓たらせそれ庵の松を
尾張の国知人ささふ文あひくまふつ返当ありやに
なとかの事しに卯月十一日京をさらてさんこりの旅行
其頃の南ハ八幡ちう此薪別悪庵一休和尚遷化の地
かり海の中の焼香のために下り侍り京の知音共
人々上る下京海く下ハ法勝寺涼茶のあそり海て
別とことよわりの遊びしそて立川の折に
たまし人ハ文もの都ん知人なとなく旅ふおもしかる也

されは其の結句誹諧一笑新人とハ今をくりて別るゝ
人ゝの手なかしし伏見津田傍若入道門てて約あり
立よりて菊乃山桜木ミ乃様あ紫野之車力のるまか
中個へいま三日もたくいそくれ待く宇治の川舟さ
しのかんとかよりり發句ホ申本
又言ひ出たる其の家なき小つまよりてかれハ翁
此所旅行あたり此様あ宇治橋やてさしの所さ
まちれ所の月夜更の清牧八幡山木津川たまれ過あひて
水鈔らく湖をかりく京あいされてまき過まらえ人て
舟よくさとて又まで又人八節の所なるし宇治乃川

瀬の水車たりとうれ世ハめくるならミみちんたちやる
ようて奥ま家し待り皆れ卿乾汀の杜若さんあひて
松りしるをしなるいく葉もかよとやせの行り
まろふ縄手れするをとうもにして船さしにかせあぐ
みか石なるすに秋八白川別ホ辻游一名曉水鶏の
うらたる家哉
谷車くゝるたるめくるホ山三の姉
誹諧みそ行る嵩護ホ東雲新義のをくりたと
いひつきらて引こ酒あり一折のそれにつりしかと
ゆるくとまの發句

なからまた有明のあさ白山
はるかなくも待りし　別当房一夜山の杖木中
潤八十三日に新茶焼香たる日三井寺衆徒坊らく
まうさし法師は兵京へ出て来二条奥坊あるらかり
は法師あかりきまて大津の濱旅宿の請引柳よ入て
上光院相州箱根別当童形二人せしこと移住院ニあ
たる法度玄紹同豊都て秋ふ来ぬあくるにした
流之一折の興行さうれれて
おととの浜山のるれあめぬを川様々なる
能々年の末川をかへおも波のよせくるさまめる

し振
いたる志は高にき雪けれたれ　玄紹に
見え嚴にも咲るにたとのよせまや宗祇一句宗牧が坂本
宗孔見りおるとしも雪て曉人つれしてと紹巴える
行ひ興行つとし半句の一折ノ果てさうさるのつれ
はるおた佗八十の坂さるつて東常坊八二と秋玄紹
瀬尻八こずのあなり来て平調一首二首ははやかなさ
てらわし身なしこて花見しく後於八十ににおろく
何中まつて百をは鋳なりわし井に遊ひけるの松も
内書もさかうこ見え秋時ーつくに旅宿大津へ帰り侍り

し十五日よりの亭主宗珪さうしかゝりし頃に奥州
いかひゝとく／＼
よろなるやしれぬ乃山越なけの海
葉乃波文に花ともみえしくらふあり東三寺に
於須大和なるの渡のおくろ岩井より連歌さし来
るく満こともに行なくてらしく濱出待りに大乃
たる家にて勝総坊の奥州に
いつ出て　かへさむ山乃も夕月秋
發句松すひ出たつるく此寺にて
月こたちまたまみえまでとひおんけに山端へ送らかくり

千載集の歌にやさしいふ舟もありく見えし何ゆかし
なり秋に入て南乃風吹時なりけむやらて渡
りぬと秋十五夜の月松かさをたいかぬまうとの山
より立れかり浅み侍ともかなたる中りにあそ一日行
ありく又の日乃連歌あり
く井なく先を出て苗さうにも朝日殿
河井駿河ろれ連のふりぬとし山まで来りかくて
乃山とてえて翌日連歌あり
卯のとれやうろく小れろ木乃宿
鋭寺にて稗村中勢亟かちこれやられ駿河守息

乃童殿同五郎連歌にかたく発句をもとめられぬ廿二日
立ひく柿崎ありしなどよりぬけて鈴鹿山の坂の下
まで案内者同行元馬にて行るのたびにも山門抜白
川井の名河のきてや清く人をとゞまらむ酒肴山中の
興忘れがたくしかくどくろわが人出て宮とかじる
もなし坂の下につきぬ亀山より文字ありとぞる
の乞座体息主殺ハ坂の下の旅宿にて山の晩がしみ
夜ふけて紹巴宮にてのり屋舎にても逢いにてる
袂さへあに時雨たりけりになく
鈴鹿山声のよ鳴なる時雨やここにいでよみをする鶯

声のまゝ鳴つゞはるかなたせまや文字の上人のあとの山彼
誠とかく
鈴鹿山すさ世をそれにすゞみ捨ていかにかへり来方るへき
うら座と侍るなかりけり
すゞか山姉捨ぬ身の跡にハ老のなみもかれしをかぞへて
あつさをかれて誹諧比興とて文字をかへるごとく
なお波方歌あるにて鈴鹿川八十瀬の浪を鳴かたはらに
また白かたにしなかにハ亀山にも又旅宿ハ野村大
歌会やかく風呂あり何似毎ゝの鷲山正法寺と
て山居あり業平の門徒役五十町ばかり作花

の年につきその月のおなし廿六日早朝宗碩をたつねて
おはされしやらぬとみえし入りそりいおもかし
西宮城寺河内の山西まて過きてなん比叡たちて君
ふかく松杉のゝ村立もおなし飛寺の西の麓山の林護寺
まも似るものつきし人の寺大雲寺の水めくりてとく
何月梅花ともおなし仏前をも以上あくやまとにとかく
みえとくつゝ座し正法寺長老宗牧何似斎其へいは
下臺寺清猷西にさゝひて寛山にゆかぬ翌朝日に
まくられて何似斎の飯あり拍清朝飯あり吸かけ
おもひよりつゝ待りしを又連歌興行發句にとゝしの

秋京へのほりし侍しに此れの年を座しとして
八十路に溺の身またり秋の露
此ひいはれいとおもひくゝる老ひ侍りしこそ
ころたひもさこに八幡みし八宮寺　一例
由さのをてたる事や尋ねくさす　宗長
一日とて又会あり
うへくこれこれ寿して生の国の行
又二日三日ありて正法寺みある前夕より一宿因道の下
風呂又の日鶯の巣山見まうく宗碩何似斎誘引茶
の細道めくりのくらうへよりみなさるゝ宿座をさ

しもへよる海のおもしろきを画くらふれは見えけるに
せい海とよむ山ありけりとなむ祥禎の事には
やことなきつくれ巌を構へ倉門は石を棟柱四方五十
町谷あつめてみな九数万軍ならひなむ人もおそる
あらんこそとて日正清なれはあらひ眞禅なる是は福
寺門梵住持和漢張行あり
ましれなむ山をやと残よかなしきに
人知　五月涼
一折のうちに墨出して詠唱数量はふるて　帰路着
みなれしと又今月廿五日月次法楽として催しに慈恩

寺といふなく
五月雨はまさそけの水のちえ紫式
又廿九日新福寺にて
四方の香はちりさちはなのあすまなか
是は旧宛梓筌の代
六月二日於寓何似無一読十五首息次第盛（盛イ）祥明　顕
集の内書ぬきて当座文墨はして数殊和歌をぬ
人に扇をつかはして侍りなかめてもさつきそとありしに
誰と契も友といふらむなつくへは来ると家しる裕のか
扇の絵　松ありて　七十八七十七

亀山旅宿井村大炊介宗賀なるものゝ屋敷をかりけるに
入て旅のつかれにうちふしぬ明くれは不便なりしにあまり
に旅宿の小庭に有し楓にはるかへさりとてあたら哥をそへて
しをれたるをよみたる所の立待しところの紅葉を招かへしに
つかはしぬ

明日よりも露の宿とひとみさそひなん秋そこのもみち葉
何似斎息男正祥有故ひかけ待ぬる旅宿錢
ろうそくはまつし朝まやかゝりし

人はおもむものおもんを残しそけさは乳ておろそもなれをさ

正祥

返し

ふるも何とて乳てふふて人のまめくるやなまゝらん
何似斎より五月雨半明きかしに路ふりつく
しく日まその末つとてなくさめ花ありて面白うありし
井に神戸右京進盛長ありのつゐてにはたの
関何似斎一族号神戸平氏也
頭阿切関阿切トテ尺八名物也一ヨ切ノ尺八也
尺八笛を吹よやそくみせられはしつかりてさ
らしやつきたるにはた面白さもしいるひ度なす
文してさらひ侍りきるを

暁の友をそろえていまのゆふけにや花のかひはあれと
人の許より篠粽せんとい二色ゝ得られしに
ふさしきや山のまろ篠粽数八十杖子有はて

杉原伊賀入道宗伊百首歌亀山にて自筆一巻
孝盛息俗名賢盛
ありしこと書をきてたてまつられけり所望
しそうらひしかとも今は伊賀守孝盛のかたに
侍り御代の瓦礫
今も世にはまれなる歌よみのやうにおもひなされ
亀山は慈恩寺相福寺阿弥陀寺長福寺等七箇寺各律
院七堂ならびにおなしく宿所々々東西市町あり既
に尾張の国へとりかへし立たてる判(?)にも後はこゝより
使をつかはして一ひと文字もあり清家門に法印
今川氏親病気故清法印ヲ招請
中合間道しても天下の亀鑑のためしにはまさりけるを

くて亀山より京へ人度々つかはせ候何似斎よりも
同しく使備馬其六千疋許の御礼より結康
山坂下る為に申し侍る六月五日亀山下向して
のりものしつらひなとつくりしかし一日休息
七日に森島へ佐渡より伊勢尾張の行ちかひの
舟にてまかせ何似斎のとりの人にも舟を出して
中ちからまかせたる
静かなる浪のおちこちの舟つゝかなくも見えなから
亀山より十日にさらひ送る附く猶く何似斎の芳志
難挿の一つまりなくして六月七日尾張知多郡大野

の旅宿八日より参河苅屋といふ所水野和泉[近守]か宿所
一宿同国土呂[本願寺流]一向堂一日逗留十日に今橋牧野[今吉田也田口氏清方]
田三一宿十一日遠江吉見十二日引馬飯尾善四郎
一宿十三日懸川一宿逗留十五日駿河藤枝鬼巌
寺十六日府中打出夕立して宇津の山にて雨宿して
つた卅第屋むかしより名物十団子こゝろみ一杯
に十つゝかけゝるそめらうたまとりすくもせ興し
て夜に入て着府一両日休息龍王殿[氏親子息]對面盃之
献道作[氏親]の清茶[茶イ]等それより逐日旅宿の手ことくして
清見か関のゆふへにし又京より[清法印之事]同名乃人あひとも
なひ侍るのとせんいるいせんらく興津彦左衛尉正信[今川被官]宿
所にて又七月廿七日此磯の夕暮にすゝみゐるとて
浪の音夕やまかせも出つゝふ磯まの月をとてらいさる夫
廿八日京よりの人々の為に此いそにおいて一續之十首歌
三條[實望卿]前内府沙在国中なるをとて張行し侍り同詠吟
既小京硯蓋磯あそひをくらまして
まつむしと鳴の声わかるゝ松に清見か関の縁をそへする
返し
契つもしも忘れぬなるか老の波胡ちるあたりの色移するとく
廿九日宗祇故人先年當国下向にかゝりあひし折にたひ侍

是ハらしりそれの一折張行

おもひつゝきても聞る身となるみ

ちかみハ先年此寺に誘引して聞ける一折の発句

月そ引袖にせきくる清見かた

なかしハおもこふ愚句なりしも新古今集に

ことへの面影にめる清見浮袖にせきくる波の面影

あの歌なるにや宗祇此寺一宿ありし名十八年に旅ね

一折乃清けく寄月 膝回と以ふ歌愚訣

清見寺
月ハあるやこの磯なまで七十にこほすくのおくれし不風 山ノ上瀧アリ

卅年伊に瑞雲庵法上にる杖なく様をうつへさせ

月かりにうちて日暮し奥まで京まで俳諧に

こともしろ秋又みなくも浪のうへ乃雲をかくしつゝうつゝの寺

雲浪らく京の人此寺北海庵乃ことよら京みちゆくそ

草庵をむすびて十とせにかりにや今ハなれ人なく荒し

なそたるをみて

日比正廣招月庵
おもひそく清見が磯の草の庵あるとやなをありとあらん

正廣先年下向又此磯に誘引してこ保が崎あるれて

あれなるせてうへろさに

月あつくる幾世の波を清見浮ませてもあり以哭のあとられ

関のあとられ乃柱にかゝつ布くとうぢしなれ今ハその

桂さゝ朽なそめまて

かくてつましき枝さしにそへつる紀乃朽てのちぬ泪のまゝに

此寺回禄乃後ハ等持院殿（高氏将軍）夢窓國師（開山也）さへ参れること

ちかくにおもし傾きを拝して深く悲涙して

法身深窓のあらはれ給ふ跡を昔にかへしてこそあらめん

なをみくかへらまて後洪枝を経冊管にさす種を

やそ長宝寺殿（義忠号長宝寺殿桂山）らりませ法うちそれしにおもしく此跡

とそへらまてとあるしに

またうち法を祝ひかくれ法身浮遠をまに其のあろ紀

此跡を箱のつくに蔵侍まらせて自悪かりしいまは

能登の守護（畠山修理大夫）より何かとあらむ

藤増とて十二三乃童形に紅梅さの宮さまに高父市川

右訴まそ八朔の翌日一折興行　執筆藤増

ちやしそめし発句松の下れ萩の浅香

此ちくハ其の年齢冥童を退の志るまへさ代　廣成貞

まそ松土れをやしとろめ乃其の萩と万葉とやらん斜よ

や萩ハとをあらにまうに生ゑそうを松形の中うまよ

めりまや府中に赴りて京都の同僚の人乃為よ興行

さ数されハこやこの柳しれ　秋夜當

又ハ此山さそなうまの分ハ数の中しれ秋の當座ん

こゝろえたり八月中旬あたりより予親族尽く嗜
これは無非時にもたえかねて
雲とひまも稀なるかれは時雨庵とさこそいへ庵なりし
九月始めつかた堀越町落出て人あまた落馬して
半身かなはず右の手もかなはずして
いよいよせん物うさすふ事はやまこそよろしとて志ある
京よりの人々へかなしく新酬恩庵の住僧よりの御使
待つことありて
老なるまゝにてや山城の薪にとゞまりぬ七十あまりて
酬恩庵にして終焉の事を思ひ待なるべし 禅

正月十日つゝ奥津より温湯の湯治のついでとて
上城の庭の山家の氏発句あと所望ありしに
みかさひはあれぬ庭の草木の姉
今年の暮れて今ひとつ年をとらしし 津 （氏輝童名）
大永六年正月ちかきに駿主殿発句にて独吟
雪のうちの梅咲庭のあさしつか
さ川そへ日もやすまれのうくひす 宗長
あら玉のとしのいくはるをまもん
伊勢のあのつかの所望なり
あまたとふとや何をとかのうら風雲

甲斐の国より人の所望みに

かひかねのみなかみなるやいさは川志らねのやま

河邊の宿所にて

さゝなみやなか川をすみあるゝもみゆ　為經

奥津もりやまの嵐なく清見か関をさしこえつゝゆく

はるれともまたは鹿なき浦のくく

實望公也氏親姉聟也御方ト八公兄卿ノ事也三条殿御子

三條殿清方任月次に

かくことに海を隔なるはるかなる秋哉

河原なる所にて

夕まくみ身も白きさし河原風

清見かたの河原より書つゝ給て京のしる人のもとへのかせ給ひ　新才

なか月の　かつらさをあふ　京の雨　夜半の比ろ

なにはすみ　露はしられず　かゝくの　うきはらんとく

木も草も　まつ枝の行も　見えつゝ　あるまゝに

すみれても　花とのほこて　たりくま　こゝはこらなる

君ふかる　たりふきて　めしおかく　またみえんも

またくに　こゝすま人せん　いて吟は　絶てしは何く

ちえみれと　なみみそこは　引そあるに　むかれこすゝそ

清見潟と　此葉とともに　川ふえかの　むしゆくらの

宅のとも　かき添かして　たゝくは　立よるをさそ
志らさりし　たゝぎ志めをく　家居は　すゝめのこゑの
かくりこに　竹あまかくる　窓ちかの　ふしみ野をへは
塩きゝの　夕顔志らき　かきつよ　小家ちかなる
住なりにて　市女あき人　まずゆくを　あはいしも作
なきとひし　白妙を作と　こゑくは　門さへ残きを
いつとなく　家をる明月　あるる門　くるへき影
老ぬれは　みなよのうれし　古ころ寄る風
家は田舎の住居の悪りあらそこつき侘ありあくれそし
色ゝれとへし　文宗はいかにつらん田舎にも大海なり

くらしいつくかしらさし出へくもなくて儀のかよひもこえ
侍らしに
いつゝ志る本宗暦こそ茶湯をも味噌法志らぬ西の流れ
時多き人文月千栄をもて耳のまりなく鳴は十
三日なり
住まゐちんや去年豊に立ゝくれまつらん志らく秋山時雨
七月廿九日宗祇筆にて発句
のこり侍る秋やは事を君たる林の月　氏親法名 紹僖
何にのかりさけいまし　へ昔　黄　宗長
又

ならひしてふかきわかれハ老をそ忍ふる
此道の情あかく宗碩をへ中の人せ侍る
豊雅楽頭繞秋一回忌に
おなしき八月日まつる一筆の其道とうけつきおもひしろ代
いつしらん秋の風のつくまて是を寄しのうつれ也けに
玉ゆらも世のうかるやいさらん末の露ちるかれ萩のりの宗や
あひしまも世にうかりける御身をいかさうをもにある中まも
ひとひゐふかた世の常も此秋の露ふきしきてひろ世にかくれハ
心なくあらましの一ふし是白雪
かりそめも惜みしひかの名残をそ世にこまに長さ別るれ

かくのみもにけはかなはのくるゝハ老なりけぬ世のすまひ心をしらぬ
世をそふれハ一とせきりも歩きてこみかへよさへなかき世なりけ也
えかなしやまた人の頃れなかひあかく世をかへりてん名をそ高く成し
豊雅楽頭繞秋京に有ても田舎にありても行時移
めしけとりふ日もなくかよこみよ文のうちも八十よ合き
まても絡もうまく年秋京之文のかせ仕へりしにはし月まん
冬十九日はまうの折成し此返事寄縁深かりしぬるを
なとかさて明る廿日に身ゆりの侍るこたつん掛けしよ（笙一統ノ師也）
繞秋ハ家督の長者として天子の御師範に系
里拙みの志つく雲井をこゑて此世又大和歌のふそきせ

侍らね叡進所くれ崗庭の二首三首の歌まく
妖艶なる名どもありておかさるあつくさまとハ我ホ
にいろまくはさりきあんのり京行なとく
めでたひの歌勧きして今日の詠どもこひ待まれ
又ふたりなしくもろ人もなかりつべし逍遥院殿（三条西殿）より
しそも必ずところの一條侍従興行ありの山中ありめて
さそふ嵐の暁のねざめまかのしあそ十首の歌々のつら
ねて懐を述べ侍る事ありなし同三條内府（実望）侍
在中将十首など清書加へ侍る饒秋一周忌に付て
逍遥院の為十首の詠歌加へ一覧義懐をかけりしは

仍愚詠の事斟酌なりしかさる事は罵尾標と述
と車れめくるやう庶幾まれ秋の空の別路とどひあへに
いまはそう契の風のつくこても秋なかさるまやなとん
一 咲萩のりとれ雲やまの露も消し名残ものこるまゝのえ
折くハ家も見えさして庭なる？秋の色ぞ見えん
面影ハやつゝ立ちさして笛竹の秋のこゝろよ秋のころ見ん
露にうつ草のうらもうきひくやとのたこそのえの宿
一 うしやとし夢となりてもうつのふうつよ諸る面影のみ
秋の秋の末さやうつもよりかこきみのまれ数のまよ
夢なりそとしいハいうそ為茎の詩や身にそふ形見なほ

かゝせ山吉ゆへ候ふミの事御申せ候て御心得候へく候

去月二日尊札今日十九日到来披拝候ハ本懐候

一路次中無事下着之由尤珍重候就彼御詠草之

御沙汰候今案候

一御詠草之趣披見候紙上候ハ雖見始て今度ハ清

書候て進候紙面ニ畏入候

一去月十五日不慮痢病煩候存命限今日ハ如御札

令見候年来之御縁之儀難忘候不可過之候ハ哀被

存命今一度再会之念願計候一向平臥之間以代

筆申入候委細猶申候恐惶敬白

統秋在判

八月十九日

柴屋参

如此返状翌日廿日到来

統秋一回忌追善頓証十首十一月十二日下着書加

まかりのぼり悼統秋朝臣和歌十首以法花経題號

並句首

めかれしにはかなき僧のものいそきたちて着たりけるやうくしさ舞

うつ蝉のよの一時しや仏の事をきゝしふ人のこゝろかな

法華経にこそ頼む身のためならむことのみ露いつくん

うち返し花そのかはれる人とハゝ一はやせてし侍ること

きゝし人のなかに出立たりくも物に隠されぬ姿なりしを
むつましと思ひてぬ物におろかなるの人くなせし給ひてし
ねふりとも何されと頼むは世には名残り人にありしや
こゝにいて人に教て筆竹のみちれさまならぬかりける
やよやすそこそれたるも雪せるやうかはとふる經ある陀
うつある物とはなよと思ひみちや消もなれけること
為一周忌自我偈を浄自筆にかいてくされて下さる
浄奥手云
此偈者一経所説之眼目諸佛出世之本懐也而
今逆故雅樂頭繞秋朝臣周忌辰拭老涙染短筆

作頼幽霊増進佛果乃為法華平等利益
大永五年八月廿日　三条西殿 素门堯空
あふそよ月はかりの雲かくれ法華にあるらしと思ふ物かゝ
旅人のきちかく萩萩をとふ人あらでの秋
ふりくる人もかれ夕くれ萩さへて風と露とに
ちか萩をおりて人に
なる月もかれ外の萩かも折りて人に見やと露をもろん
去年此秋為もかしすもしにやはなし庵り
なきけるを
蔵下てきつゝてなかしそれかゝりぬすこゝなの秋のの

其夜は夜明まではいつよりも又まくらもの明待かねしに
命ちからなくおとろへぬ抱や見なまんすまじき孫が松枝の一首
長田四郎右衛門親重（尾州人）此年月病して剃髪たりしかと
ありて本心も及なく非常に語忽も立ちかれて
後なれんには至ごの人々そのむねをつぶしさればひ出ゆきし
命ひさしく出る事を世をさりし後又誰かやかましく
なりて月日をすごしけるに窮困にならずなりて一振
一腰身にかくるとのまくらも沽却しけるはまくらまで
なく人の物のをかたくしけるは名をあらその願
なひなして飢寒の二字この者のあらぬにてへし

あそれくは妻子もなも縁ありて我ちやりしもしばしは知らぬ
ものもつねの何しくつくろ旧借の返済ともあれくらせて
僕従乃せめつるひまもなくなりしてハむしろもせまくし
まひての事までや此月の十七日の夜過よ木の鉄をむ
東へ向してなほの縄の一尺ばかりもなれもやがて自ら
といふこうぞ我あへに頭をのべ桁よりおろしけるりて
すへりそうを死すると有り明る朝己の剃下女ことの
急けるりに告るとありし比のだれもひいかなるもの
をもおや其日さうじんれはいさか誉の胡蕾をとかへらて来いか
思ひよりなん志をあわれ深かりしをもへて人は繭枕

の口論よりさしもちかへ我坊にして討死せらる事
侍の常のことなり虎ハ死して皮をとゝめ人ハ死て
名残すとむかしよりいへり希代の事なるへし彼と
ふらひのため六字の名号を句ことにをくて給
に六字をさかさまにとりて志をのふ六首
かこつかな露の命のあるそとこころほそくてハ南無阿弥陀仏
むへもこそとひせハ日もかさぬそれ南無阿弥陀仏
あさ顔の露の命の秋を過て風をまつらん南無阿弥陀仏
みつせ川渡るをまつはしるしみなしの南無阿弥陀仏
たらちねの人や父も立へかへるへき南無阿弥陀仏

われハつくしに年さへしもとく命長さの南無阿弥陀仏
ひさ文加賀守（今川被官 永用 藤加賀守）安元年舊好のむかしを思ひ又いくなく
そやこかへてめくる年にあひ侍るもなミたに
袖とあさきやうつゝの名よくも時々と云ハ哀なるらめや
文明七八九年の愚句よ
めくれのふる人ハたうしか
あやうさも身にかゝるそめくり逢見まし
九月四日に勝にかなしく呼出て秋のをくるゝ光の
ふ玉ゝしのもかきてそ明る胡の庭の霧をと
萩か花さかりめくる年毎に我身ハ勝にせかし秋のうれのかなしさ

紫野山門再興奉加の為によゝにかゝぬ物して二十年をまて
沽却しけれともそれに源氏物語を売りてまかれし
とも心ら厚くして

はかなくも我かとかくらん乾る河瀬をそこの夷の白波

ひなもたちつる人ハいかり

かれてゆひよ露をおもへにほせしのなかあ草村宗祇

萩をおもくこ人のひひとおもてる音

秋風の吹さてこそらん糸萩のにほひもたわむれ

か庵して

あさ風にわするゝもいと萩とおもていやんすらん

旅宿此庵に枝の一丈をかゝりてみちの程の里ハこの
あたる所に帰らせて

まれの宗ハみやまの労の胡床民

さ 連歌各一種一瓶興に入し支あり
横山城主
奥津来九郎清えうえかくなんとくまとくれし

清えうるゝ明らかにてよ浪の上に月の昇る末の白雲

かくしとハなくて

清見潟はる月のまれなるかなめとうるるともの末て波

さ 秋の九月の盡に七旬あまりの長命なることをたのもしくて
七十八九月をとりふ年を歌に読して

なかきよの長月とてもさむからぬよはのねざめのとこまで

此秋の侍従内府三条殿浄空侍方紹依屋形関口氏兼小原親高由良左近保悟珠大宅氏易

くりかへしまつのよこそ長きやまたひとよにかはらねどいかにせん　浄空

たらされつるふやとしは長月やまたふけてまつのまくらせん　御方公兄

ちとせ経んやそちは織んたゝの秋くりかへしくしはのとこまで　紹依

氏兼

千代経んなかちとせは長月のなかのみちはまことの

いくちよの長月のなかをさそへて老をぬく菊の花　親高

幾千代もなかをまつなかの長月も暮ゆくまゝの秋　保悟

君ちよは暮月も長月のなかにありても老川のとこまで　珠易

此帖短冊奥津氏九郎兵衛仕御の勅書古の為として送

まし屋さしまいらせに文書くたんの参り

なかの歳秋菊の長月やけふ末も祝ふのとこまで

なれちしめ彦哉一文よせへくめて花くるをさしたる歟
専よのゝ初すの晴れ秋風のつゝき成祥寺彦哉
道依（親氏）よりてつかんあまりの志にて咲たる一枝をとらせられしハ
所々よりそへられしる歟
行方の中にゑの一枝のいつよして富士川辺のさ子に咲らん
待返し
かさもくにめやハうつらん苦ゝ中にはまれなる花ハうつらんけのを
下野国那須脇の郎とて出家して宗長の庵にと一
日をとて立よりこゝ将軍家御待の上とく尾張一宿
の（童男）後若ゝ若衆せし等さまのと付てさせて愁傷よ

あへ泣して跡をとふ花とやらんきく見えて同じの侘
かくりし行方をも見ることにかねえて
暁といへよ別て立あかんたりの愛花（ホイ）有明の花月
やうそ此一花哉卒都婆に書付ぬへさたなとそ行見し
此十月に（今川被官）浦添弥右衛門とても訪いこと来しらへ花有痢病
を煩て日数ありしく死去を愛花のまゝの歳四郎
そのありさまを哀しゝ折ふし菊の枝に付てつかはし
は侮つらし
よしいりたゝ葉風の人の露いかにかからん老の袖をしそいふ
猶さあのそら庵ゝくるをもと家て時雨行から

の一ふしハうき世の中をよそにすなをと古ことおもひあはせそ

暁の嵐にむせひふ扇の一ふしとる也いつもおもふらん

此度莫為作者法名保悟かこのあやふく冨士のすそ
一把その文乃返事にいひ遣はし侍る
なをよくにとろく侍る此ゆふまきこの雨しぬれにその夕霧ハふりつ
保悟ニ人し
雨ふりて世をいとふ冨士の綿帽子たゝぬるよに秋の夕暮ゆふかれん
十月十四日父の年忌にあたりて物のいとなみもなくして
まことに涙の玉ちるをハ夢に見しものもあはれなるむしけるかな
痢病にて日比わつらひてむなしくなる

今まてもかくれなきさうらふものかれ名をハ甚とあるといふん
けふつまりてに當家惣社（府中一宮ト淺間一所鎮座也）の神主志賀後河内（号惣社宮内廿輔）泰守終
日もをのかうせしに當社造営由来乃事かゝりて後
代ゝる護の敬信顕文かきの事かゝりて後文にいひ
法からし侍る方此事執心ありてこそなし
沈みまつりて山のそのまゝ此度の名あかく雲もかに
十一月廿日將王敬清元服ありて東郷氏輝とあく
祝言祝儀例年のことくなるとて同廿五日の祝言
法樂連歌發句

霜を残しハつるともひかりの花そさかす

古今集四書五冊口伝切紙八枚氏輝へまいらせ候よ
侍りあとはしたのをとへつしくらてぬよハ侍らねと氏
輝女も行すゑこそ見えねいつくにかくらせ給ひてのち
自見あるまて年月のゝちのとも紅ましひ枝あつて八人書あつめに
行ゑらすへきかんや
あさ名ハ宗長といひしを老いはてゝ家のをまよ伝へきこえん
宗祇古人の道統ありさらにして諸家の師範と
なりける逍遥院殿下逍遥院殿是空門叟一人の法口
侍らやまね同首して数年を執心一度もあらさらす
志すもりしやうし此集結縁ばかりの只一篇あらんかし

年なりへし此時に青蓮院殿治部卿法眼泰経同随
る人の中にあらすして年月をおもひやりけると
行りしか八幡月十日に連歌興行の席兼日発句
風やなるみわたしにちるこそなりけりか
かの袖をからて結ひしおもれ君や
太谷寺観音勧請の所長谷堂ある秋焼火のおやまち
とそれ年ありし我等年にうらみてそのまつり
法楽連歌に宗長の発句
うつしたハ池のおもかけあしたの秋
火坑変成池のおもかけなるへし

建長寺ハ東堂歳首とて出府あり幸のついてにや
下野守時茂和漢連歌興行
かさえ添て斤枝甚まて梅の春
雪消尚臘天　建長寺　長樂寺
鶯児總学語　天龍寺　養得寺
發句ハ五郎氏輝の代に申侍る
宗碩法師 月村斎 歌よみて文にあり中に七ゝ文字挟さ
もしたらて
歌にハ二十のにまり一もしれ二文字たらぬ歌あまたあり
こゝのおせ侍り

表布夜師三郎五郎と云綾小路室町とおもひきぬの
法ににあり桃のとのあやしく後に下さはとりそてと
てまのたよりなる法にも西河法のうしやくてく門別
のよりおもかせはらくすまく
何つゝのみちうれおもせろくさきあん三郎五郎ての官名
権大納言宣胤氏輝ノ舅也大永五年
中納言一位せし十一月十七日法身逝去 八十四歳 法進下有長何宗統
まくハ展感法身思されハ一七日茶湯焼香せ十一月
十七日法月忌はしめる
東のかたへもあまおもいとさらぬ別まて来ハあの遠
宣胤卿ノ
法諱世の歌とそ見せさせひぬ

さひあへぬをおくれ来ぬるうらつまの袖にかゝるゝ露の跡
ぬれ返しことハなくておちの人丈のくれに涙ぞこぼるゝ
これハ粒涙おちそふ袖乃つゆにやとおもひなさるゝぞの跡
涕辞世のうたなるを句れハうらふとおもふ三十一首の
題目府浄さに中請て月忌の始一続中催しけるへり
ひさ一続中亜か何二首　初秋露　披書毫昔
秋風の荻の上葉も露まして袖にや露のあまりんとすらん
のちも猶おもふかなるれいそのかみへて消ぬ筆乃跡
あの一続は読せられて乃ちにとくおちらけれ人の文なり
みてあるに皆てぞふか猶ゝなみ人の心にそれを実にもとぞ思ふ

下野守時茂続次人よ来て宋説歳暮ハ不無借銭返
辨枝持続ふ万に来たらぬたゝの次第に例の先
乃あることを
一借銭借米の償ひ営むなさは人にかくのしめられ
悪口せられて赤面のことも忽に無理非道のこゝそ
まりし人ともいへる次
一祈念用御とりめ利く売買とせんにハあるまじ凡
等ハ人ハ佛神をもいたゝき世間の盛衰を知めず
常月毛の興拒ともあゝ朋友よもうとくもし
されの故ともかあるさせ唯利く売買の工夫勝の

神社を仏寺なんやしきの沽券なくらゐを
いふへし又出家も知行ある僧俗の利く
売買はさせらる合へし又酒屋とく京堺南都
坂本なとにても利く売買せしめらるまし
かるへし

一 巡礼往来付く判く当寺慈悲のためとして
いへとも巡礼するものを虐たるまし極まれ民とく
許容せすしたまんけらハ仏神作法のつみくたを
まハるへしめすらハともちすはまハあるまて

一 旅宿々にて瘦待一所継命の知行まもけつとなす

いつの人ともせすされハ妻子ハたちまれさまとあとを
の糧つきて女ハ水を汲男ハ木をきりひ子
はぬのまんまん人のやいことなりたひりし一旬ハ祢
油をまふ役のかさりなりへしされハ仏ある人ハもひ
とろるまとまるも代りを加へし一紙半銭のたとも
これらまこそ云人を何るなし是慈悲の玉梢
たちなし路次に物をもひ家に門々にたちまちとらし
ものいふ人ハ其是慈悲和尚二句にも
あれそこの日すこし拭ひ旅ゆる人ハ世を渡る道の為には
その世をまなる人をふんあえし又古今中ん

俺人のはさて衆生あるとハ救ひもあるへからさる哉
不運のめくりきたるや
一獅子舞猿飼今たゝき万歳をせりなといふハ或ハ
手に赤りさしてありく哀なるすかたハあさましきまて
ハ世中たのめなく分さへ人の為をも付もせんまて
いかむともせさらんハ世をわたる人なるへし癩病人
非人の乞食ハ或ハたゝちにれかしむれ我の限なるへし
一参禅学道の人ありかたき大切の人なるへし去なから
大かたをたのまんくの参禅求師遊山に侍るも
進退を極めて

一教外別伝不立文字の宗師令旅人なりん参者
也魔魔ともに天狗ともいはれんといふ人侍し是
こかせ俗にいへハ魔縁天狗なりやとも程長老坊主
余所へこまりよ我ハ官家に満しられあるハ去檀那を
わりなくとめ山林斗藪を結縁し寄進し来者
を接し家身接するゐ知識にあれともさすかにかく
念仏之味ハてハいつもまたいきさ修行なりあとのふ人
作りなからも入用をあしくも得道つくいハ家ホ
やうの悪癡情純乃修行にまかせて侍れ
一父祖の家父母も去聖霊の月ごと無縁僧応真

一次第座以下飾りに多人数ハいかにそや皇設岸
も冬ハ別毎月人数さためらるゝさまにあらて一月の中
度く九月忌日次第粥飯の雑事目にみえまし
て備物精なるへし
一弓馬物具をととのへられ共を棟持まゐらせんや侍
道といふ座ならん文作なるを物からとりをぬりの
毒気結搆せられともさもあるへし胡蘆の添付は
こそいふへかるへし
宇津の山にて伴の年比家居をしめさまくあるせに
此度京にありて残月廿六日に又帰り侍待らん

年の暮は薪なるへきわりそれをかうる丸山の中なりとも通
此門出は山城薪へ俺の村ありけんの中なるへし
今よりいち丸薪も取るへし宇津の山の松はかゝらせて
彼山居萱垣といふめあるは蔭箔竹のすまきに行て
めなさしそ中を便居侍りしに廿七日行て大雪
埋りてあるかゝこそ埋もなうてなかく行く
らくもうれん侍りしは
我庵はかやまに垣あし簾ことの一首かそれや侍
此十首　宗牧
あかすも立帰りきてもなるも行きて望人は庭の白雪

たをうへし庭の石本に花咲ていつし荒もてぬ宿代
山里は谷の戸とや絹の宿りをすれ志らぬ窓の昔成
宿ふれハ垣根も見えに雪あらしそなたつの夜へ無ふ山さ
葛楓日の目もいつる古山路のあゆみにかゝりて宿りつ
秋をかつ道伝ひやらしふる雪にて晩の峡坂人をしと
のやをもしれおそらし消え首の行の中をのあゆきさ
霧ふかき月へ岸の尾を見まつとはなる老木白雪
八十まて出る半をうれへまむ岩も雪を捉ろ人行
雪の内つもりてこゝも今そ志らへはゝとまもたゝし氏本を
波よ人の庭ふかく木をはかそみし世まも似ぬ

さて世のたゝ満足もひ出てまた侍りし人のたくさへしきしろ
なるを満足して中侍る越ありし既に除夜にむかへて
行ねん末代ひの新玉のとしといふ人の識らぬさ
除夜のあした試筆す
くるといふを狼も明ぬまての絶なく年まの清雪
同二日の朝山樹にむかせて思はれやまそ
何も昨もくるを老の山椒にむかせとしくれ石にそ備乾
正月廿八日不忘度清英詠り
不尽やおもしろみの四方の刈の春
すみの山をたち入りくや侍り

本末揃侍り方入法楽の為名号まて二月八日恭以

亭七日當座あり此亭に旅宿途一折興行

なをさくらいつかまちぬ宿もかな

九日朝より入小川殿（氏親母公伊勢新九郎妹）侍見参之献色て侍んのちち

なみたもろにてありしの侍従より袖をも形の

給へるやうにゆくく悲しさ逆感此度八子細年

につゝまれとありくもと不気し笑て下支まてしは必く

存侍りへとおほせやうく存たゝりんまち所とやかて

御とりて発句し侍折紙色々ことの筆もはなそこそ

作つ也

同十日宇津の山の麓丸子宗居一宿して侍るありと

中村十一日丸子胡小川へ召立ぬ小川長谷川（小川法栄子息）元長

子句誹色をきのふよりも十二日始行恭以あまく

残りにとて同道す子句三日發句

中川の桑してみれそろふし下山櫻

南出此ちろまての心ありそれ一入面白かるあり

文亀日

ゆくあとふ面影の名ぞふるや分きつの好

別と来といつくもうれ久御一乃ゆ

餞別の名唐と在所さ侍らは八分つ人も

同廿日すてに小川を渡りて泰以て代
到りぬ
立別れ今ハ後ハなるち孫のおやにいまと許とらん
廿四日
おかち父君すて哉の音をとりきれむよつ弟経もしなか
かるにに立まよさ夜の中山の奥をとかめやとりふ
たり一宿して
貴度も又鐵んをそ行をと老を経みあ日さ夜の長山
みか身と取りてくちろみ人しふ大ハのふ分りとひ
おかせられぬ命にて越えて侍也

抑長山の手西行上人ふかの山にて歎あけさる
男女につまとて半にも弱るきさるに男詠たる云
山ハ昔長山とやなるといひなれハいそ長山とハ此山
老るにかの男田翁の井に有く山長明かまたハ古
詠ともかりこやんといひ旅の小ろ小紬採ぬれて
やるまこけると彼西行上人の東路の紀よありされと命
分りなきさ夜の中山小夜乃長山とや上人も詠せ
らまとなるとにかりおかもや仍此東路の記ハ糟屋井楼
杉隠今川被友 桐川何人 所持も写して此度小川に借用して
一見しゆるなしにけり

廿一日戀川恭徳亭廿二日例一折興行
たつ霞れとこえるもか山さかる
当城数年さ西く當請嶋ハ幽谷のきりし山ハ嶺
の桃櫻あらくしもそめもなく霞の巣山さもいふへく
左れ花雲のとありくさとみえはてくるると興し
て花を愛してとこえるまやなをたゝもひとまゝ侍る計
なるへし
戀川廿一日二日より森西三月朔日まて晴曇も雨
ふりふりして又連歌あり
委西乃とゝ色ことさ来の板屋民

三日府中六所夜明日連歌日行なれハとこ暁発
句とて
花さえてなるてふこの手ともせ民
にほ桃花の香もせまてなるへし

日本政府図書

群書類従巻第三百廿六上

国立公文書館
National Archives of Japan